

一一一 鎮靈詞（若年者）

これの小床を飯の靈舎と天つ管曾の清々しく被い清めて 今し鎮め奉り齋い奉る
故△△△△大人の靈の御前に慎しみ敬い歎かいて白さく
空蟬の人の世は果敢なく定め難きものにして我がものと思ふこの身一つさえかし
ものかりものとは知りつれど 親神は現世での陽氣ぐらしを目標とされ 尚
百十五歳を定め命と約束されてありしを 汝大人の昨日に変わる今日の
御姿を見奉りては誰かは驚き嘆かざらむなどてこれの世を退向になしてかく
はあわただしくも出直しまし、ぞ あな悲しあな悔し 今は早や汝大人の笑まし
き面影を見る能わず ああ汝大人の若く明るき御声に再び触れることなし 思
い返せば汝大人はや幸少なき身としてこの世に生まれ出で給いしが 祖父母が親
の代わりとなりてむしろ温かき懐のまに、く育ち給いき 冷たき世の嵐は
直接幼き汝大人にはかゝらざりしならむ 伸びくと思ふがまゝに若さの喜びと
夢をはぐくみつゝ、人となり給わむ 良き兄代り姉代りの兄弟姉妹の真心を受け
しならむ などて未だ蕾のまゝ、二十五才というをこの世の涯りとして御空を渡る
さやけき月の影わずかの雲井にさえ打消ゆるが如く たゞ独り淋しく親神のふと
ころに身退りししぞ 悲しとも悲しく口惜しとも口惜しき極みになむ 然はあれ
ども現世に生まれ出づるも出直すも事ごとに親神の御量にしあれば 今更に歎
き悲しむとも効無きことて 明日を御葬の日と齋い定めて 今宵しも新靈をこ
れの靈代に齋い奉り鎮め奉らくを 今ゆ後これの〇〇家はもとより縁ある家族
親族 更に△△△講につながる道の子たちを八十連綿五十彊八桑枝の如く
向坂に立ち栄えしめ給えと露けき袖の涙をしぼりつゝ、恐みくも白す